

佳作

名前も知らないピアニスト

広島県 広島市立祇園中学校三年 森本 悠花

顔も知らない人に心を救われたことはあるだろうか。目に見えない物に感動を覚えたことはあるだろうか。

私は、中学一年生の冬、テストで思うように点が伸びず、苦しい思いをしていた。朝、早く起きて勉強し、学校へ行き授業を受け、部活をする。その後、塾で勉強し、家に帰ってから勉強。テストが近づくとき、そんな毎が続いていた。睡眠時間を削り、ただだらと机に向かうだけでは、点数が伸びるはずもなく、体調もだんだん悪くなっていった。

そんな時、家への帰り道を歩いていると、ふいにピアノの音がきこえた。どこからきこえているのか探すと、一年ほど前にできた、一軒家からだった。美しいピアノの音色が、そこからきこえていた。

私は夏休み中のことを思い出した。部活からの帰

り道。その時もこの家から、ピアノの音がきこえたのだ。ただ、その時のピアノの音は、途中で止まってしまったたり、音を間違えたりと、とても上手、とは言えなかった。

私は習い事でピアノをしていた。上手く弾けると楽しかった。でも、だんだん曲が難しくなって、自分ができない部分を見るのが嫌になって辞めた。だから、「この弾いている人もきつと辞めてしまうのだろうか」と思った。自分の弱い部分をしっかり見て、苦手な所ばかりを練習するのはとても難しいことだと思いついていった。

けれど、半年後の一軒家からきこえるピアノの音はとても綺麗なものだだった。なにより、無理矢理ではなく、楽しんで弾いているのがよく分かった。

私は、自分がひどく情けなく思えた。うじうじと私が考え込んでいる間にも、誰かは確実に一歩一歩進んでいるのだと。努力をしている人に対し、辞めてしまうのだろうか、と思ったことをとても恥ずかしく感じた。

綺麗なピアノの音色を聴き、帰り道を歩きながら考えた。努力をし、結果を出す、ということは、どんなことなのだろう。思えば、私は全てのことに対

し、何となくして、それなりの結果が出れば満足、というような中途半端な気持ちでしか、物事に取り組んだことはなかった。全力を尽くすことが、なんだか、かっこ悪く感じていたのだ。

だが、ピアノを弾いていた人は違った。ひたむきに努力し、上達していったのだろう。

かっこいい、と思った。私も成し遂げてみたい、と思った。私の中途半端な考え方を変えてくれたのは、名前も知らない人が弾いたピアノの音だったのだ。

中学三年生の、受験生と言われるのも、大分慣れた今、あの時の美しい音色を心に刻んで、日々努力している。